

# 「窓」としての国語の教科書

三浦しをん

国語の教科書は、未知の作家と出会える「窓」のよ  
うな存在だった。新学年を迎え、真新しい教科書を受  
け取ると、載っている小説や詩をすぐに読んだ。つるつ  
としたページの感触とともに、そのときの胸躍る気持  
ちをよく覚えていた。数学や物理の教科書は、ついに  
一度も開かずじまいのページが多々あったが（理解が  
追いつかず、授業中にボーンとしていたから）、国語  
に限っては授業がはじまるのを待ちきれず、どんどん  
「窓」を開けてたくてたまらなかった。

高校の教科書に載っていた作品で印象深いのは、中  
島敦の『山月記』だ。漢語が多く、取っつきにくいと  
も思ったが、文章が宿す独特の肌触りが魅力的で、繰  
り返し読んだ。あまりにも気に入ったので、ここだけ  
の話、自室で情感たつぷりに音読までしてしまった。

ひとが虎になって、しかもしゃべるなんて、妙な話  
だ。でも、寓話というには生々しいし、傲慢と高すぎ  
る自尊心を戒める教訓話にしては切実さが漂っている。  
なんというか、さびしい物語だと感じた。

この小説を書いた中島敦とは、どんなひとなのか。  
学校図書館で全集を読んでみた。ほかの作品も総じて  
妙で、しかし硬質で透きとおった輝きを放っていた。  
それは、ひとの心の奥底にあるさびしさが放つ輝き  
だった。

私にとって中島敦は、大好きな作家の一人となった。  
書棚の目立つ場所に文庫版の全集を置き、いまま折節  
読み返している。教科書という「窓」のおかげで、高  
校生のときに中島敦の作品と出会ったことができ、とて  
も幸運だった。

本を読めと無理に勧めても、読書が好きではないひ  
とには苦痛にしかならない。書物は万能薬ではないし、  
即効性もないのだ。けれど、悩みや迷いを抱えたと  
き、孤独に耐えきれなくなりそうとき、寄り添って  
くれる頼もしい友となる可能性を秘めている。「そう  
だ、本がある」といつか思い出すきっかけになるよう  
な、他者と通じる「窓」。国語の教科書とは、そうい  
う存在なのだと思う。

（みうらしをん・作家）